

利根川番志

五

20 1 2 3 4 5 6 7 8 9 130 1 2 3 4 5

12



513

32827

利根川圖志卷五

下總 布川 赤松宗且 義知



麻賀多大明神

公津村稷山の上

小あり

延喜式

載了所印播郡一座麻賀多神社是あり。公津の村名臺方と本と

也。下方江弁須大袋飯仲。之乃公津不属也。まうと公津新田あり。古

へ神津と書たるよ。今臺方の下不鳥居河岸ありて。沼の中不

鳥居建り。あまをふいち神津あり。佐倉風土記云 應神天

皇御宇。印波國造伊都許利命齋祭稚産靈神攝社本三十八座。今

存者五座。曰印波國造社。曰幸靈神社。曰馬來田。即女神社。曰猿田

彦神社。曰天日津久神社。社司太田氏家藏貞治永正官幣祝文。其

祖家清記詳焉。有七井七臺併在社外。四方三百步。所謂初井。花井。

北井。南井。御手洗井。大井。椿井。乾有説教臺。北有北野臺。東有元松

臺南有平松臺。天神臺。西有社司殿臺。花輪臺。神門。左右百二十步。有七冢。正月七日採七種菜於七冢而薦之。古有祭田七區。七氏分掌。以供祭祀。油免。薦布免。德。楸免。團子免。神酒免。御齋免。巫免。是也。今僅存其名耳。後俗曰租賦為免

神津八十墓 在神津村東北二三里原上。多數故名之。傳千葉氏也。世之瑩然不詳名誌焉。

超林寺 在神津臺方。文明十三年平輔胤建之。以常陸國杉室大雄院五世。周齋和尚為開山焉。

平貞胤墓 在神津麻野。碑誌曰。千葉貞胤。當鄉諸人各敬白。于時觀應二年辛卯天四月日。其石今在超林寺庭際焉。

公津宗吾墓 公津村臺の山中不あり。成田より一里西の方あり。墓碑左の如し。

徳満院涼風道閑居士 右の脇。道了彦七。道明徳治左の脇。

小道安乙治 道露徳松とあり。おの四人の子供あり。

又同村菩提所鳴鐘山東勝寺真言の過去帳不へ道閑信士俗名

宗吾兼應二癸巳年八月四日と見ゆ。是もとの改名あり。それ後

寶曆二申年百回忌の節涼風道閑居士と改め。そめて石碑と

造立せらきとあり。寛政三亥年院號とそへて今の石碑

不改め建つとあり。石碑不四人の子供と。皆男子の名不あり。

たると故あると。宗吾の妻へ同村理兵衛といふとの娘

ふると。是へ宗吾出訴の以前四人の子と遣して離別せると

なり。故不妻へ宗吾死しての後十七年とふがらへて寛文九酉

年九月十四日不病死といふ。改名へ妙閑信女とおれり。過去

帳不見。ゆ宗吾へ父子五人。際際せらきと事へ世人のよく知る

ところあり。

東勝寺本堂不在る位牌の文左不

位牌の表

道了 道明
德滿院涼風道閑居士
道安 明露

同背面小

道閑 宗俗名 吾
了明安露
長男 彦七
次女 ホトウ
三女 ホトウ
季女 トチ

兼應二癸巳秋八月四日。父子五人爲國民捐命。寶曆二壬申年。正當一百回忌。而改涼風道閑居士。又享和二壬戌。執行一百五十四忌之法會。寬政三辛亥。追謚德滿院。造立石塔。皆依領主之命。茲嘉永壬子。係二百遠忌。由是造立廟堂及神像。神版等若干物。以當法事。克追遠之禮。

鳴鐘山主照專拜誌

鷺山壘

在神津村上。千葉氏世居之。天正中良胤時。城廢焉。

藥師寺

船形村小あり。本尊藥師佛ハ行基僧正の作。開基不詳。

鐘銘曰

下總國印東莊八代。鄉船形藥師寺。應長元年亥年十一月願主僧良圓敬白。大工沙弥善性と見也。

船形神社

佐倉風土記。櫻山内津社在船形村。千座山。距櫻山社可二里。亦伊都許利命齋祭。雜日吳尊。以爲瀧津宮。攝社三座。曰賀志波比賣神社。曰阿須波神社。曰八代稻荷神社。是也。

根山神社

北須賀村門河とつ小所あり。牛頭天王と祭る。此所鳥獵第一の場と云。ヤウギリ綱ふて捕。切と云。義あり。此邊沼小真菰多し。水鳥ハマコモの寶と好て。養了者也。マコモの寶ハ

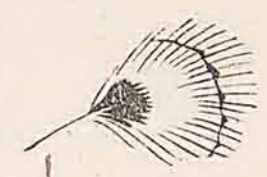
麥の如き物。小して人え。是と食。詩佛西遊詩草云。美濃國今尾村。足立氏宅。食菘米菘米之著。於書自屈原以下。及唐宋之詩人。言其美者多矣。我邦未聞有賞之者。予食之。以今日爲初。因賦一絶。而記其事。淡於蕎麥香。於稷真味。初知在水郷。非向君家留竹枝。一生不信。

ヤハライボ

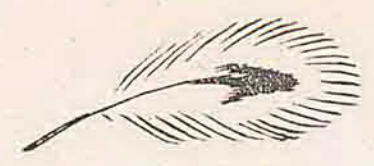


素真

頭の羽



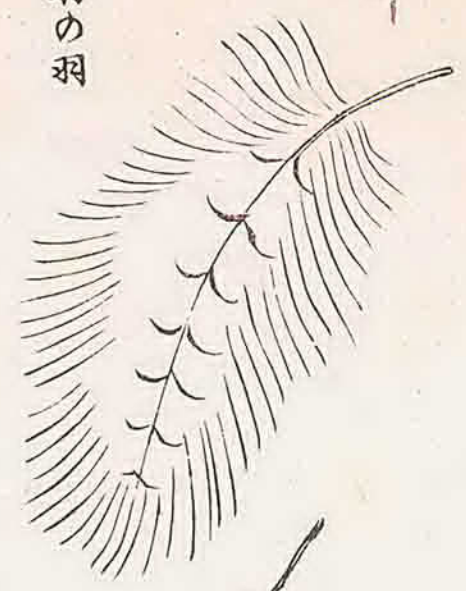
背の羽



同足



腹の羽



胸の羽



印東

四

有菰梁 菰米一名菰梁

谷原イボ 六の鳥畫ハ人目小めくら故不見人稀 大さ

羽色とも細く 鶯小似て黄を多く帯たり五月頃より昏夜中まで

ス細くイボ大声と鳴く聲螺小似たり大倉州志七十物産羽之屬 蘆

車々 潜蘆葦中北郷謂之蘆鴉夏秋入餌

ホシク鳥 小鳥みて谷原小栖む夏月昏夜小ホシくと細く聲小

て鳴く鳩より小さ

天竺山龍角寺 龍角寺村小あり寺南小洞穴沙伽陀池あり名所

以り諸國圭齊録下總國天台宗小二十石 植生郡龍角寺村 龍角寺と

見ゆ佐倉風土記云傳和銅二年龍女化現奉金像藥師來建寺天

平二年釋命上人再興諸堂三年天下早魃命奉勅說法祈雨一

叟長可八尺進曰我小龍常居南池深浴上人法澤何惜一軀請以

身換雨後必見我骸而證之即是為大龍所罰也忽然而去雨從至

馬後七日果有龍身分裂三段頭墜于此乃金字寫經併座堂下寺

始曰龍閣於是改龍角腹墜于印西龍腹寺其尾墜于香取郡今大

寺村龍尾寺是也貞觀元年慈覺大師住此說法天曆三年三月八

日異僧來彫金剛神一軀畢忽失所在柱上留題曰此寺藥師乃西

天竺祇園精舍療病院之像故我為彫金剛神而猶恐人不信一軀

而止我是昆首羯摩也正曆中運慶續刻石金剛神化作即左今共

存馬兼久二年上總介平常秀重修營常秀千葉常重曾孫稱坂平

次兵工也正應三年十一月鑄巨鐘文明中焚如而寛永三年改鑄

馬文明永正再罹火災平勝胤修造馬天正八年又有災平邦胤重

造營馬相馬日記云松崎村とりの所より 登りて登りて

むつうの朔日十五日廿八日天竺山龍角寺小龍神の社あり 月

といふ洞穴三ありて中石疊と設け昔ハく住ミたむ跡と

小国内第一の犬あり松木の根ハいとつて七木ハ今れと

五
くさーおほへりとそおさくて谷下八千把の池とて水多
くもふさき有りのとあまの所松一本たてりこハあるひふ
つめりの池のあまこへ一日千把の苗どうもむとかせさ
るる子獲れ困るをまらると埋るゝあるの松もて千ハ
池とりかまそれとや
負へる名ふとそ

駒形明神

安食村あり佐倉風士記云社司木内晴風十五世木
内三郎宗文正安二年九月記曰下總国埴生郡安食郷駒形神社
郡司大浦朝臣廣足所祭穀神也天永二年夏五月廿一日安食郷
大水同三年夏大旱仁平元年夏六月十五日又大水民大飢凡三
年矣於是同年秋九月九日建社於駒形山上用祭五穀神焉其社
號曰駒形神社同二年五穀大孰是年郡司令曰是則神之賜也自
今以後民可得安於食也請改號其郷曰安食郷又置神田使木内
晴風掌祭祀焉安食郷舊名川崎郷郡司大浦朝臣廣足 崇神天
皇七世孫御諸別王之苗裔也今社司木内氏藏之享保四年吉田
兼敬卿書跋云

鷲宮

同村印播江へ指出たる山の頂ふあり別當正徳寺毎年正
月十一月初酉の日遠近の老若参詣群集此所印播江の下流
みて長門の口と云長門のありあて印播江と將監川と落合ひ
夫より東の方へ五六町流れて利根川合を三方の船着あて
至て賑はく繁昌の地あり

布録新田

南將監川と北下利根川との間あり一嶋ありその嶋
上へ木下より下安食まで堅二里横一里とりふ元録年中開發
村數二十五川除堤周圍長六千四百五十七間其内三千五百五間
へ北利根川通り二千九百五十二間へ南將監川通りと古書に
見えたりされど古くよりあり嶋あり常總軍記に布録ふへ
布録但馬丸岡喜一同彦市あど見えたり

藤藏河岸

生板真山新田兩村入會の地あり下總常陸兩國を跨
る其を藤藏と云獵師住し所也其名起きりとぞ今へ利根

川運送の荷物龍ヶ崎邊へとの河岸より上下する由急至て繁

昌のところあり龍ヶ崎 江一里

龍ヶ崎 常州河内郡あり仙臺君の御陳屋あり享保十三年水無

月下旬みちのくは太守羽林中良將吉村とつゝるまこの鹿嶋

道の記ふ云その日へ道とるうらなれば暮ふなり戌の刻まぐ

る程ふ布川とつゝる所に着てやどりぬ又の日常陸の國ふい

ぬまづうふ二里斗はる道びれば己の刻をうらた至りつたぬ

是龍ヶ崎爰ふもまが領地のありなればとところれ者ども出あひ

てあるひしてうあことなと見せ侍とぬそののみ文治の比を

ひ我祖常陸入道念西宗号朝同宗村等の住給ひ一真壁郡中村の

庄へ此ところより十餘里と奄だてもるうなるよう一残のふ

此度らふ来る序ふ見まほしくおもひふよど遠なれば見

ざして過る事いと本意ふら朝村主のかと初とおもひ

それと筑波根のまを輪の田井も住ふれふなりとよと給ひ

へ新拾遺ふ入侍にやとれうき昔の事とたひひ出て見ぬ世

の事もあつううのなまき

近めらば行て見よ筑波根は裾乃田井の世々のふ名

あと北ふあさまで古城ありこれへ天正のころ土岐左衛門尉

頼貞とつゝる人住たる城ありといふ四方ふ堀のうとありて

築立たるやうある山城あり樹木枝とあるひ茂るあはたの中

ふ太神宮鹿嶋の神社あり上へ平らふして中ふ谷とへだて

て二の曲輪とらうと見えこり其曲輪の東ふ龍ヶ峯とい

へるととゆあり爰ふのぞみて見渡侍るふ東へかまは海

見えて眺望かぎりなり南へ田面さうりふはるさそありたり

田子のさあへうりるはま管の小笠うらきて聲残あげてうと

ひのうきるはふいと真ありてまばらう時とらうぬ

乙女子が笠のあはれぐく小山田小早苗とてれいとほあげな
 る爰と出て大統寺盤若院あとりくる寺小行ぬ寛永のころ山
 戸土佐とりくるもの此所小久しく住居せをそけ人建立せ
 一寺ありといふ今い領地のうちあるまびのさりの寺領残つ
 け置ぬあふドれ僧爰ふきたる事とよろこび出會てとえなひ
 ありく南ふあたりて愛宕社ありをれいちり此盤若院別當つ
 とむるとて先たち行ぬこの山下ふあふと塚といくる古塚あ
 り何のゆゑありともあらばむりうのひつとある名なり
 といふ見るとにわづとのもちとふせとるやふる形あり夫ゆゑ
 うくのりくるあふべり夕つくと舎をふ入てゆあふあふとてを
 へぐとわりりちつと志のぎうれのひふど志たゝめてあ
 りふ日をくらし侍る小庭の木ぬりき隠ふ蟬の鳴を聞
 おのがあはれらふさふえ猶この頃れあつとやあふば蟬の鳴

ら守夜ふ入て所ふけあく目代郡司あど残め一出して今ま
 での所れあきてふどくわくたつ杯あらとふ志めを事おや
 かと日が本國ふ替り他の領地も中とりたる事あればあらふ
 心をつけて民の勞をふくつらふべりよえ人とあらそふ事
 ふくれあどつひふくめあまの河船ふ乗て潮來のつらやで下
 るべり船の數出さむもところれはむづらひよりあふ供あふ
 せのも半ハ中湊やで陸地をたういさふべりまたきくごり船
 みてい老いぶとてづきよーさくめていこくふけゆけはらや
 去みんを夜半まごころ頃より風吹出ぬ明行頃さのふ行てあひ
 侍る大統寺盤若院來りなぬめいーちり我このととらふさ
 たふふさふーふとて筆の物といこくのぞこくわが辞がこく
 大字ふ書た多詩を彼あたりの僧ふあこへぬ寺の具となさむ
 とてよろこびあへるをいとくわつとくたむてあむむ

ごあり猶風やまぬ船のうちいりつとせし追手あきばさ
りあらとと宿のあつとつふあうせて日出る頃ふ出ぬ一里
餘り行て利根川のやとりに至る藤藏爰より船ふのれり側近
さもの十餘輩とらざりておふト船ふのる外さす此の船五
艘ふあつらへて漕出ぬ所の男女川岸ふはどひ見物せりいと
それぐま浪まこ高うらかども河船ふれば何のあは
ら紀事もあつさへと去れとて身ふむ風の秋々と
うりあると

こぬ秋えらわづら船ふりつと追手をぎと川りせぞ
ふ

潮來の宮本水雲云龍ヶ崎ハ信田郡江戸崎の城主土岐美濃守
治頼が二子左兵衛督胤倫の居城あつ其上正平五年北朝永三年春
日中將顯國三村より起りて駒馬沼田城ふ入とつふ事鶴岡社

勢記ふえたるハ土岐氏の後ハ搦とる龍崎あつへハ駒馬ハ
古城あつ龍崎ハ其隣村あつ殊ハ新地あつハなり且其城田地
を東南ふらけて沼田といふ名目もあつ云

常總軍記卷十二云常州江戸崎ハ土岐主膳龍ヶ崎ハ土岐大學
津守頼光の嫡頼國の末子美濃守頼房始て美濃國土岐郡住
是土岐の先祖あつ然る其頃人皇七十二代白河院御宇兼
曆年中六孫王經基の次男武藏守滿政の曾孫あつ駿河守定宗
といふ人頼義義家御父子の武門棟梁の如く君の御あえも
よきととそねいり小身なれハ自力ハ叶ひらく頼房の家
督美濃守因房とす、めて隠謀とふやりかくて濃洲青の原
一戦ハ打ちけ定宗ハ腹切て死す国房ハ罪と謝して降参せり
よつて阿波國へ流されり程ふく永保年中御免有て国房本
官ハ大寺大納言殿と守りて當國ハ来りて住居是江戶崎龍ヶ
崎土岐の祖ありされハ年へて武勇の家あつハ近郷を伐とり
推塚、駒塚、羽賀、小の古渡、大屋、佐藏、君嶋、大室あつハ
佐塗戸半田、長峯、君山、長掉以下都合八十三郷と持つ、け信田
郡河内郡ハ今ハ兄弟の中也去ハ龍崎後誥セハ心多あり元來
り是を助け江戶崎と攻れハ又龍崎後誥セハ心多あり元來
も是とらりら云

稻敷郷 龍崎の東あり八代村といふとあり宮本水雲云今の

八代村ハ和名抄稻敷郷あり今ハ其地ハ稻塚と云ふあり風土

記常陸風土記也信田郡の下ハ風俗諺云葦原鹿其味若爛喫異山宍矣

常陸下總二国大獵無可絶尽也其里西飯名社此即筑波岳所有

飯名神之別屬也とあり葦原ハ今龍ヶ崎以下長棹源清田より

下總の地ふつたり新田とありさる地あて古葦原あり一時二

国の畷さかむあり地あり残以て二国の人々獵せし所と見えたり

扱飯名ハ即後ハ稻とつりしものあて稻敷といへるハ飯名

の神の敷地ある故此名あり後ハ八代とふれるも社めて其神

此社より地名といふるなり此地下總相馬郡於賦駅續日本記和

名抄郷名の意都郷より此地とへて信田郡榛谷駅今羽賀村也

同地而今其地不詳より故ハ扶木抄喜多院入道稻敷の里ハ

ふつとる古の官道ふりし故ハ扶木抄他つ、もく、て幾世と

らそぬいらんりその里次郎百首鴨のくくれぬくり

ふせ 皆此地とよるる歌あり是官道あれば自然詠歌ふのき

栗林義長傳

常州岡見の長臣栗林下總守義長といふハ同國河

内郡根本村の農夫忠七の三男竹松の孫ありし云傳ハ常總

軍記卷十云 文畧 根本といふ里ハ一人の農夫あり名を忠七と

いふ貧あり者といふども慈悲ありく正直ふりて一人の母ハ

孝あり或時母少一病り事有るふ是残ありト土浦ハ至り藥

と求め其うへるさ根本ハ原あり、まき人里遠き野原ありて

道ゆく人も稀ありるふの古狐松のりけハ寐入て居たりけ

ると其あつり此獵人志のびよりて射てとらんと縁らひと

の忠七ハ是と見てふむんと思ひ助けやらんと高らハ不咳と

去たりしバ狐ハ大ハ驚きて目を覚し草むらの中へ入り

入るる獵人ハ大ハ腹立獲ものをせりへせよのくしる由忠七

さぬくと詭言ふれとも獵人いさらふ聞入る忠七是非よく
 二百文有るる錢せりの者不遣ハヤウくと言ビて我家不
 歸りたり然るふ其日の暮つりて五十有餘の男一人をたら斗
 の女を連れて忠七方ふ来り云るるやう我ら奥州の者あて鎌
 倉へ行せのあるが日暮て難義ふ及ぶ何卒一夜の宿をわして
 たべと涙ふがらにひひるる故母も忠七もあびんと思ひ道も
 志まぬ野原なるた足弱を連れさうくバ定めてあんどあるべ
 一夜の明させたつるべと其夜の二人をとめさうりたり借翌
 朝ふふとれバウの女泪をるが云るるやうとづうらら真
 刈岩城郡の者あるが不仕合の事ありて身上と志まらひ鎌倉の
 伯父の所を尋ねんと譜代の家來を供ふつれ此所まで来り
 が昨夜とらに寐入一時の男の路用を持て逃と見ゆらへもく
 もくやとれ最早後へも先へも行がた何とぞ鎌倉へ参る

追いつるる憂くげんも仕るべとれバ御うくまひたぐりと
 泪流して頼るるに母も忠七も實心の者あてふむんと思ひ
 然らハ四五日足をやせめ給へ何とぞして鎌倉へ送り届け申せ
 べとてさし置るるかくて此女容顔美麗のとあらば發明ふ
 して農の業も是より早く糸機針仕事いとりしてあらざる
 事あく何夏もやさしく母もよく仕へて母も殊の外氣
 小入近所あたりの者追も誉さるる人ハあうりたりて月日
 小関守あく四五日と思ふ内ふとや四五十日も過るるが近所
 の者心つき母と忠七小相談隣家の弥兵衛を仲人とする一
 方咄し調ひ故忠七と夫婦ふこをいささうりなれ早くも八年の
 星霜を経て三人の子を設け姉のお鷹ハ七才ふなり其次ハ亀
 松とて五才あり三男竹松ハ三才あぞ成ふる折も秋の末
 つく女房ハ庭の方をうづくとして詠め居るるが泪をまぐり



みどり子の

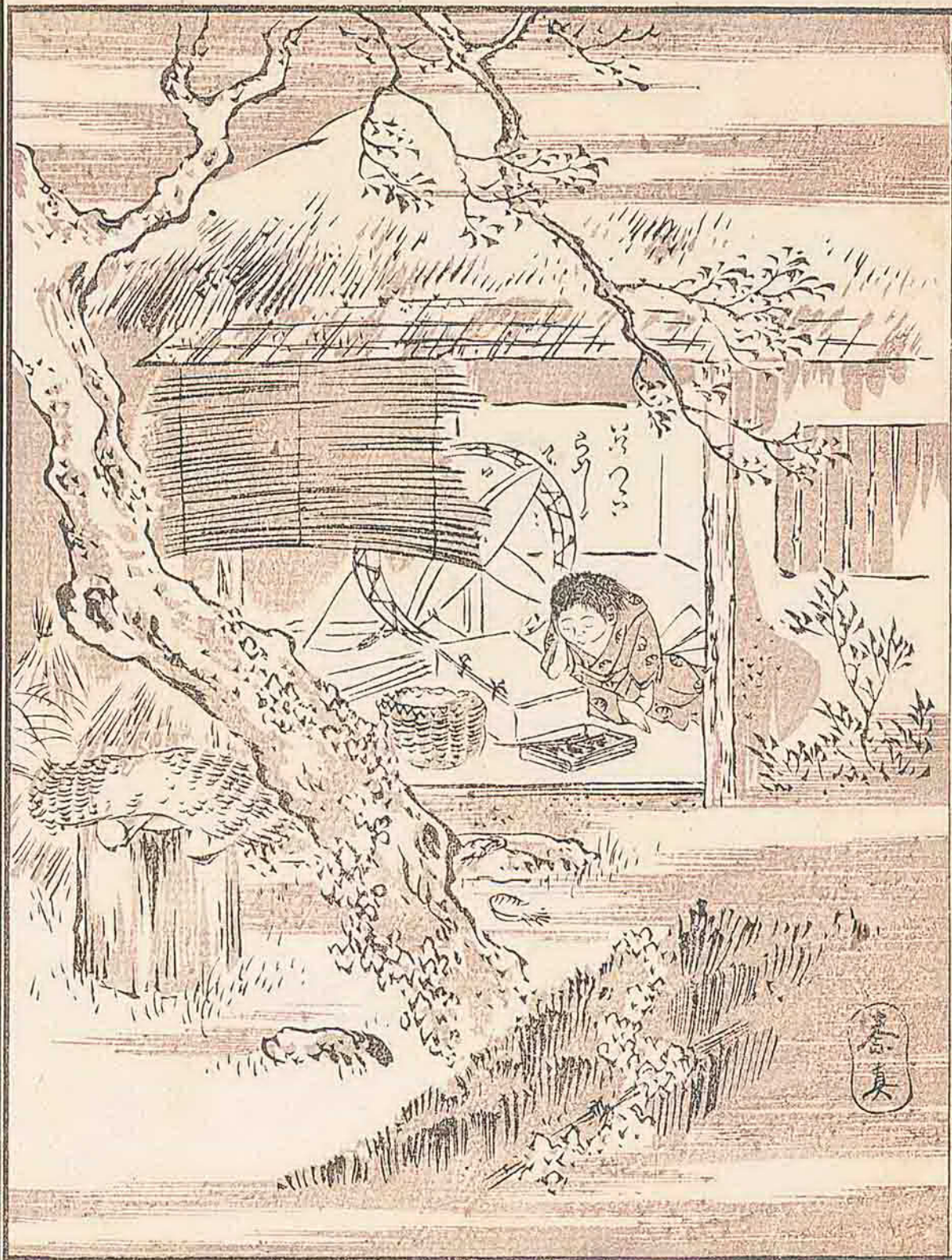
まはつとこら

をまげけれ

まはつ

ふすこ

まはつ



春真

とまき思ひはも人間に相あまきさのふらふとい思ひしがもや
ハとせ残過せうら三人の子追設けし夏あきと浅中しさい根
本が原ふ年経たる狐ありひととび入ふさとられてい人間界
の住居のあはる畜生の行へとそかふしとれと泪を流し一人
おとして泣きめけども悔てうへらぬ身の上あまきさるみても
不使なるい三人の子供いとをさひ母うへ様忠七殿も名残
をし此中く別きて行ふまばさぞや後あてうらむらん堪忍志
てとて忠七どのとくさうへしくせきくる泪と諸共ふ一詩を
まてめ竹松が帯へ結ひつけ夕暮る根本が原の古塚ふるく
く別きて帰せらる

昔日贖死野狐身偶嫁人間入忠家鴛鴦被暖八年夢積夢一女
二男生花晨月下撫前後某日冬夜戀紡績被知丁朝吾生所帰
去古塚自別離別離悲淚今難堪月三更女化之原

みどり子に母いと問ひ女化の原ふあまてと答へよ
さて忠七い三人の子供を養育し後ふ三男の竹松成長の後京
都不行て身を立其孫十二やみて古郷あつりして関東へ尋
下りし信州の山奥ふて道ふ迷ひ異人ふ逢ひ其所ふ五年を
送りし内天文地理軍学文武の道ふ達し十七やふして常陸の
國へ來りたる爰ふ岡見の臣ふ相田の住栗林左京と云者あり
一人娘有るる故此を聳とるして栗林次郎と名付後ふ下總守
義長と号し関東の孔明と称しはる是より後根本が原とをさ
慈雲山逢善寺 小野村ふあり總常日記讀むむくのつづの程ふ
ら逢善道人といひるがらふ菴めてたこるひすけりおを
志しと慈眼大師遊歴してあふ來りたを志しとを道人大師
小申せやう和僧ふふ一字をとて給へ大慈者を感じせらる
庵さよりありとめさらひおさて道人いらせぬ大師不思議ふ

おぼりたるにりつくともなく感得し給ひたる像也と我本堂
いと大きくて莊嚴又さらく二天門などおこそり也廊は
さ小て寺へまうづ逢善寺とりふり彼道人の名とりておや
せたりとぞ今も東叡山末あて寺領二百石云

高田権現 高田村小有。總常日記云。高田権現ふまうづ小野より

廿丁といへり。熊野と同躰ふおとま。朱雀帝兼平年中創造とや。其後世
々のことさ小あひておとろへたるを慶長七年三百石に神領と賜へり

今も本社并殿のことおこそりあり。神司と千田九京といふ云

大杉大明神 阿波村小あり。別當龍華山安穩寺往昔より今宮大杉大

明神と崇め奉る神躰に神護景雲年中釋勝道上人御作の降魔の靈神
不動尊あり其後 桓武天皇の御宇延暦丙子の年傳教大師の御弟子快賢
阿闍梨奥笈の逆賊降伏のため大師自ら彫刻を給ふ四魔降伏の不動明王を
乞請給ひ此地小来り靈夢ふよて大杉大明神と同一鎮座ふ奉り且天竺

傳來昆須羯摩の作彌勒菩薩の尊像と安置し奉り則ち寶刹と草創し

龍華山安穩寺と号す爾来日國家安穩祝禱の護摩修行日々怠りあく
逆賊も稍滅亡し神威日々小かやら靈驗もよく著り于茲元暦文治のあひ

と大杉大明神平氏の横行を疾く假し常陸坊海存と現し判官源の義經公
を助け平家追討の功成て後此地小帰り我像を自ら彫刻し大杉殿に納め水々

此地小止て天下泰平五穀豊登諸の難厄と救護し病患と穢ひ悪を抑へ善
とらひ禍福郷音の音應り如くふらめんと言畢て文治五年九月廿七日彩雲

乘りて忽消失給ふ依之例年九月廿七を祭祀の日とし今小行ゆる以上縁起
の趣意

名物 せんへん 是より西浦須賀津河岸へ十八丁利根川押

信田の浮嶋 霞浦小あり常州信田郡に属す浮嶋正此に居り今船ツカ山

鞍懸の松蛇峯人見の塚馬こくふとのふ名所あり又この島の三郎九工門雷
のむらといふ物を所持せりと云り石小有す金小有は土あらは何あせよめつら

し紀えれありとそ 按し雷の落たる所あり想山著聞奇集卷四に云

麻生

霞の浦

神木

本社

スガウ

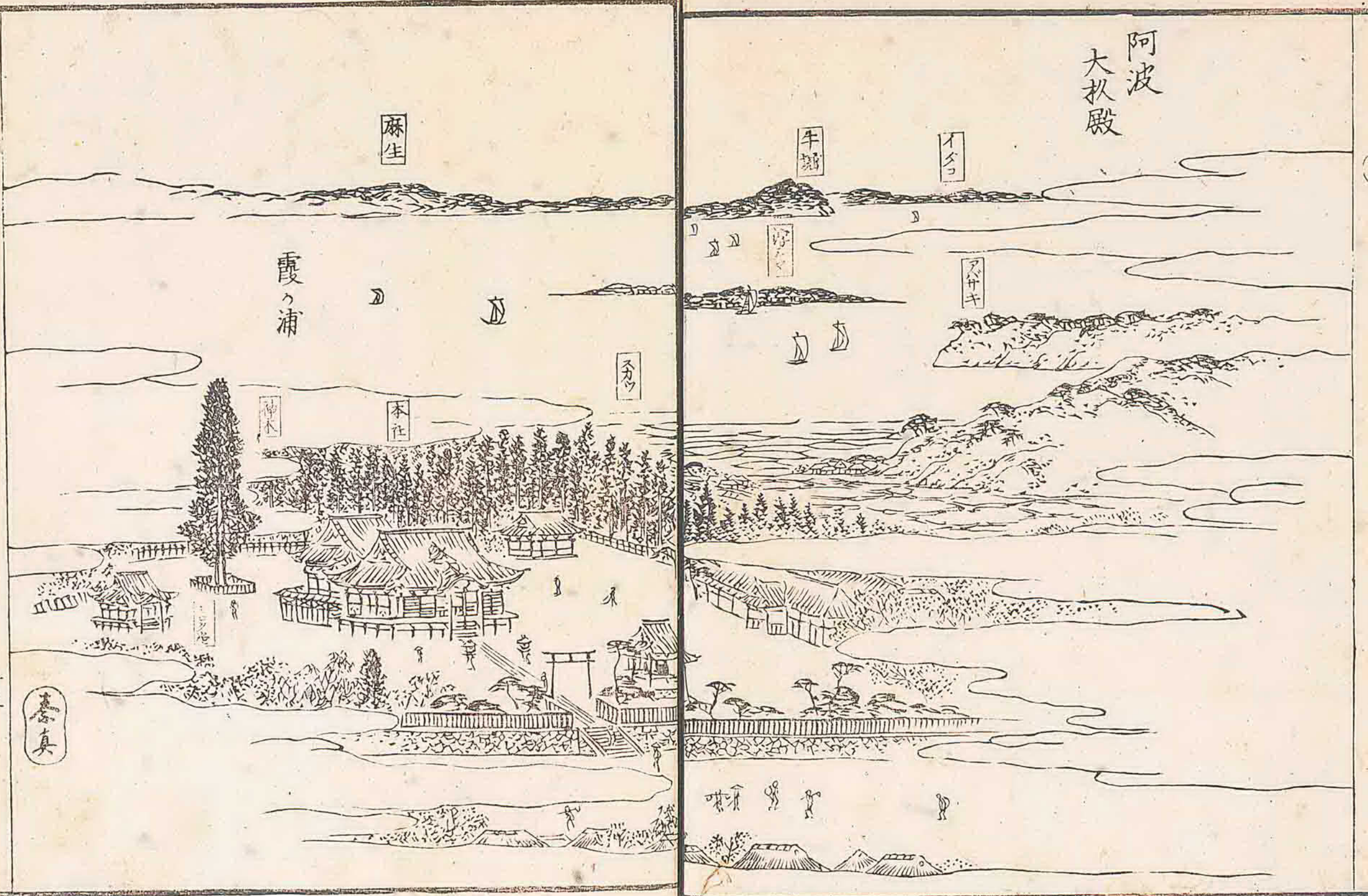
牛嶺

イタ

阿波
大波殿

又井キ

喜真



東都市谷柳町のつまは根来と云所あり此ところも根来山報
恩寺といふ真言の寺有この寺に什寶に龍の卵ふらひに雷の
玉といふ物あり龍の卵の説ハ本書雷の玉是ハ大雷の礪早稻
田邊へ雷落り其所におちて有とのこあり裏帛に寛政八
丙辰天次六月吉日天ハ古の字也とあり玉のさ一渡一三寸本書ハ
惣射曇白色に少一薄藍鼠の色を佩て薄茶色の木目のふとく
氷めの如き筋色あり全く碼碯石の如く又ハ端石の如く白茶
紺斑の色あてつやも有とも碼碯のこどくをこ通る光彩ハさ
く色も品も碼碯よりハ格外劣りたり去るうら外ハ類なき
珍敷玉なり落たる時のさまや下の方と思しと所ハ三角の
さそ有てふらも少一の所そと皮とま居たり何れもせよこる
まさるものもて雷の玉もやと思れり或人の云雷斧雷
刀、雷槌雷碯雷環雷珠雷楔雷墨雷劍雷鑽雷鑽ハといふもの有雷の

落り跡に有まの也三味線のむらゝの如くもて印部の焼物の
こととに紫黒色ふるハ雷斧ふるへく丸くして僧の袈裟よりく
了掛絡のこととよりして白色もて青を帯たりハ雷環もて牛角
の如く本太く末鋒り紫色も赤を帯りハ雷鑽もして石もあ
らま土にあくま漆の如きかてやうハ雷墨ふるへといへり
左まれば是も全く雷珠の類ならんと思はる按ハ三郎左工門
のハ此類成へ
霞浦船軍 江戸崎龍が崎の両土岐兵船七十餘艘霞うらま
浮へまつ信田古渡不出て浮嶋彈正黒田石見を案内と此ハ兩
江戸崎の懐懐ハてありたり上ハ佐竹近年疎意せしむる心
いりたく思ひハ彼篠下を喪ハ江戸崎の上岐ハ味方せり
其勢二百餘両土岐の先手を勤め惣勢合せて千五百餘人兵船
も取のど霞浦へ押出たり拵りら順風程よくして難場を
はくくなく押て行此より新庄藏人直昌聞て今佐竹より加勢
あさふおそれて土岐勢を船よりあけ立るものならハ川を渡

さき一敵とひとく味方氣おくれして千も利有へうら
以傳へ聞浮嶋黒田々攻手不加ハリ先手を勒むるよし 見是は
古一老臣也信田小太郎世盛の浮島黒田とそ船軍よもふれ一もの
ふき去とも小勢あるへ一おそろふさらは西土岐り來る共
陸路の戦いともあれ船軍よ於てハかこもらひてさ次第あり
いさやさへたつて逆寄一手並の程を見せよやく々と下知一
て兵船三十餘艘軍兵五百餘兵霞り浦よりへて揉まりんて
富田の岸ふつく兼て新庄り制作めて艀船逆船三十艘艀船と云
板よてより切て中のかえさるやうに敵船の中へ漕いきて
四方の窓をあけて弓鉄炮をつりへりくる仕りけ也。逆船と
ハかハ逆ろを仕りけ敵の中へ乗入て前後左右と
自由ハ漕めくる仕りけ也昔ハ島逆ろの争ひ是也 西土岐ハ風
もふくして難なく漕渡りて富田をさして行々るまをるう向
ふあつて兵船のちこの手見え一ハ浮嶋黒田きつと見渡
一麻生の新庄藏人う藤巴の旗印ふり定めて向ふとこえて候

我々先小進むべきあり引ついで漕うせ給ひと船を猛ふそ
一らせらるる俄小艀の風吹起り空うさ曇り雨を催一寄手の
船自在ならん藏人是と見て天ふよりとび得たりやか一こ
とくだんの船を矢のおとく寄手八十艘の中へ漕のまて火水
ふあれとせめたりるる西土岐えあそぞ大事と下知をふ一豎
横むあもん小戦へ共麻生勢ハ船軍ふあれらる上船ハ逆ろと
艀船あまば飛鳥のごとく自由をな一殊小艀船ハ土藏のごと
作りふれば敵の矢玉ハツもあたらん空矢のこみて有るれば
新庄勢のここち乗こしくさぐ小切立られハ寄手討るく
このおびたが一時崎弥兵衛羽賀次郎松山兵衛村田次郎左衛
門佐藏齊宮太田半弥柴崎忠平伊佐津太郎と初めと一て究竟
の兵八十餘人討死そ新庄ハ唯一戦小敵船十八艘分捕一勝と
こ揚て歸りりハ直昌が武勇いと高くぞ聞えらる

湖水船屋

乾は何多し世ふの山波山舟もまきぬ小土浦の
 城色多し芦馬ホ尺也もあ家の麓麓舟遊り
 飛くもあやもまもぬ男の川西末は舟も山の
 流ももも舟末の森は遠むへりも舟も舟
 舟のきも舟浪舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟
 加茂の神の社を懐ひ沖宿立木の雨大紫
 雲舟北岸舟歌舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟

高須の松は舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟
 舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟
 勢至ヶ峯社舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟
 舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟
 舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟
 舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟
 舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟
 舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟

二三日よりの舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟

舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟

○是より川南

一宮大明神 下總植生郡矢口村あり 佐倉風土記云傳延長二年九月十九日祭之

二宮大明神 同松崎村あり 年記詳ありて經津主命と祭と云

三宮大明神 同成田あり 二三町西の方郷部村あり 祭神詳ありて相馬日記あり 郷部村あり 植生大明神の社ありて鳥居あり 當

國三宮といふ額をめぐこあり 神名帳あり 見えぬ神あり云

三熊野大明神 南羽鳥あり 延長元年八月十五日祭といふ

ねえつ稿荷社 龍臺村利根川の畔堤の上あり

長沼 佐倉風土記云沮於植生郡北南北可五六里西東可六七里

一六丁多利於既灌復宜於漁釣舟楫亦通但不可致大爾首南尾北

尾為兩派西過安西新田東經西大須賀俱入利根川亦時有陰火

出水上馬長沼の北極ありて利根川の船の通ぜを漁舟楫の之あり

新妻川 同書云一水出畑田東西北流十餘里至下金山西一水出

于印播郡江弁領西東北流七里至于下金山西二水會於此西北

七八里而入長沼馬佐倉風土記之里程皆六丁一里以下准之

飯岡川 出東和泉東西流過飯岡歷荒海南橋下而入于長沼

水楸川 出大室東十里西北流過水楸而入於長沼

長沼城跡 長沼村の上あり 城主詳ありて常總軍記千葉手配

の糸小ハ長沼ハ大野修理と見えたり

源太河岸 香取郡猿山村あり 金江津と相對を是より滑川觀音

へ八町成田山へ三里

滑川觀世音 滑川村あり 滑川山龍正院といふ坂東順禮二十

八番の灵場あり 本尊十一面觀世音御長一丈二脇立不動明王

昆沙門天あり 人皇五十四代仁明天皇の御宇兼和七庚申の年

草創御堂の側あり 船越地藏の堂ありこの地藏尊綱もて朝日淵

よりすそひ上ぬふといふ觀世音ハ御丈一本尊の胎中小綱め

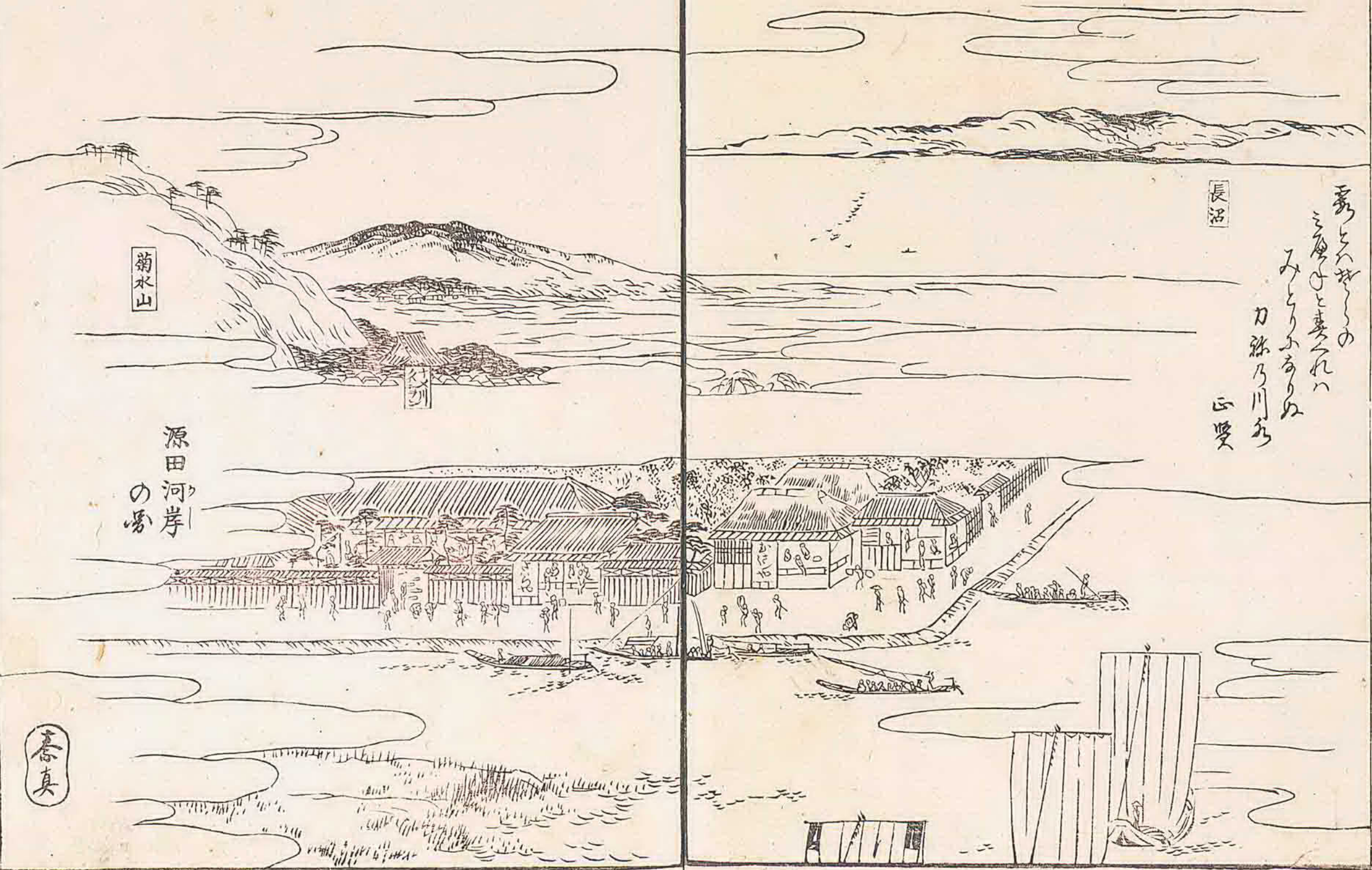
菊水山

源田河岸
の場

春真

長沼

霧と水と
の
まじり
みとらふ
乃孫乃川
心雙



あつふとりの趣起佐倉風土記云兼和七年安定朝所鑄十一面
觀世音長一丈二尺號龍正院小田將治舉長一寸二分觀音及地
藏像於小田川朝日淵以觀音納本尊腹初將治感化女自稱朝日
言粉河寺來又老僧可八十網衣浸水而後得二像云鹿嶋日記小
鐘の銘小下總國香取郡大須賀保内滑川山龍正院天和二歲癸
亥四月廿六日と多きり本尊ハ兼和のころ小田宰相將治常陸
と下總のさうひあふ小田川のけさがあちよりとり出ていつ
さまつりー灵像あふより坂東觀音灵場記九のふんゆうと諸
國圭齊録下總國天台宗部小五石植生郡滑川村龍正院
朝日淵 本堂より一町をくり西の方田の中ふありむくへ此所
常陸下總の坂あて小田川の流をみてありーあや今ハ淵瀬かろて草地と
あり大なるふだきヤサキ押六七本ありて其下ふ碑あり彫して曰
朝日淵觀音應現碑銘

朝日之淵薩埵湯靈泉朝日淵聖像入綱瀉瀑靈液湧涌人凡
感享者誰長者將治

東叡凌雲院住持探題前大僧正實乘撰
寛政九年丁巳七月

南郭集三編二十九 舟遊刀祢阻雨泊滑河村二首

長江三百里短棹一孤舟水上迷冥兩風前避急流兼葭投泊渚
雲霧問津樓登岸知何處蒼茫惹旅愁

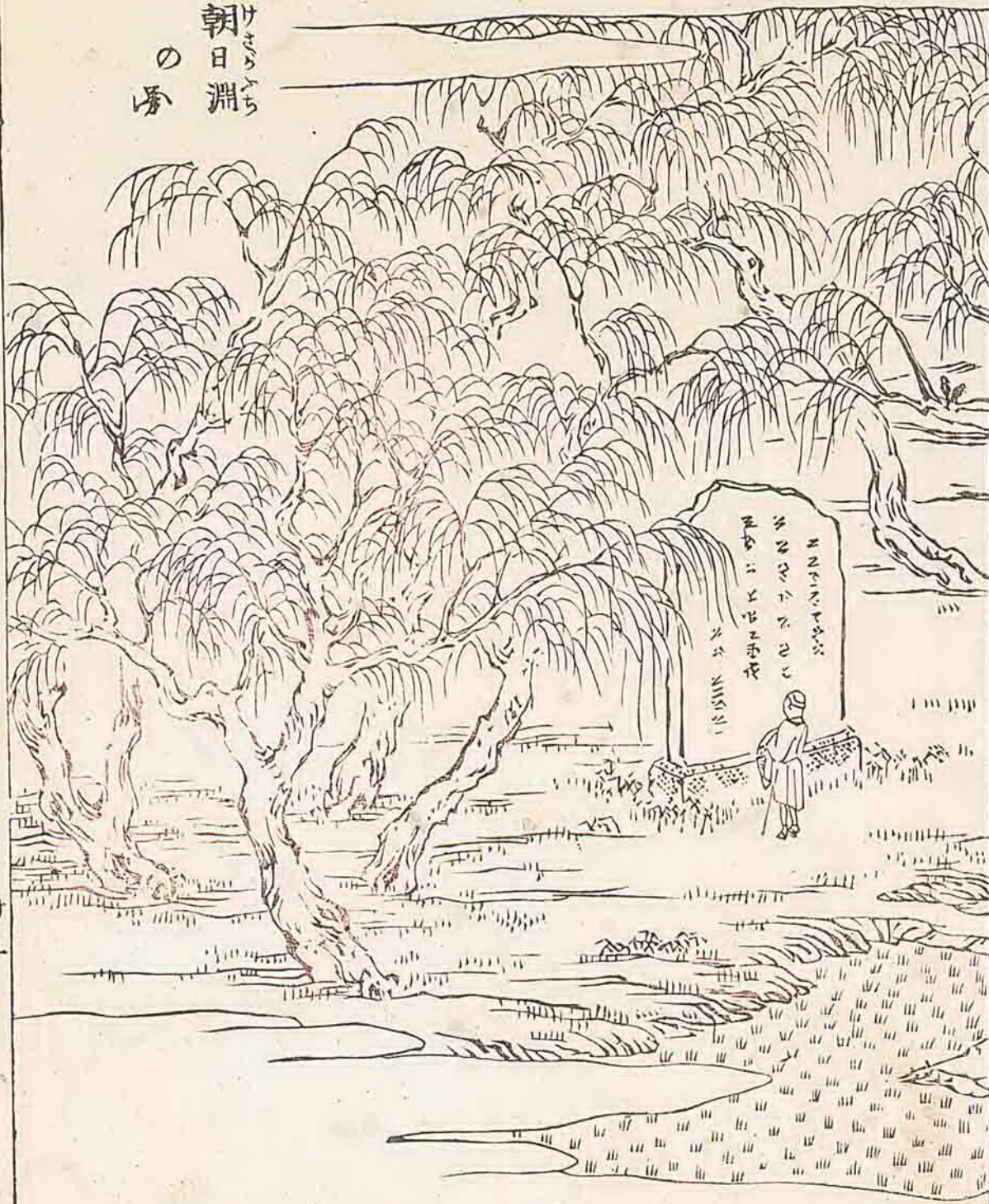
江村春雨裏寥落暮煙疎挈榼須求酒臨河定得魚蓬窓從泛宅
菘笠混幽居濯足滄浪水行應隱釣漁

菊水井 滑川町入口道の東菊水山の麓ふあり方六尺をくり石
ふて圍たう清水井あり觀音の靈水とりの側ふ菊水と云りこ
る碑あり

菊水山城跡 滑川村菊水山の上ふあり佐倉風土記云傳小田氏

朝日洲の橋

五 川南



廿二

五



景真

城之世居之按小田之系出自粟田閑白道兼而五世八田宗綱以源義朝子知家為嗣其七世正三位中將兼常陸介治久其七世左京大夫政治相續領常陸國其子讚岐守氏治号天為佐竹氏所襲遁於相摸國藤沢慶長六年終于越前國其城址在常陸國小田而筑波田土邊今泉田伏木田土浦沢辺常名北條守野柿岳真壁完戸行方海上藤沢戸崎矢田部江戸崎蝦鹿嶋足高牛久牛子生志筑山木水守小美川龍崎上室近田沼崎荊間巖崎巖田掛馬八代皆其子城家臣之所居也疑小田所領地跨此境而以菊水山或為別業或為退老之處者歟東國戰記有滑川城主小田左京大夫政治是與小田太守同入乎未之詳焉。又按長元年中小田莊司義英屬下總國司藤原包昌防平忠常馬又散見於太平記者關東軍有小田常陸前司貞宗馬小田民部太輔兼秋預萬里小路藤房俗放流者於家以預後送卿于京馬小田少將小田讚岐守小田中務大輔亦

在馬又北條記有小田宰相政治遣其臣菅谷隱岐守率兵屬氏康為而滑川觀音緣記為兼和年時有小田宰相將治者未之詳焉恐似傳聞之誤彼姑傳疑聊辨之

耀窟大明神 同書在西大須賀村社後地有一孔拜之為神在未詳其神及造建時世俗言鹿嶋神之祖父也若由是稜威雄走神也歟正徳五年社司飯岡氏請進正一位云
八幡大明神 同村堤の内ふあり堤の向ふ八幡沼といふぬまはりて其中小鳥居たてり

東三井寺 同村ふあり云傳ふ是日本三三井寺の其一ふと云瑠璃光山千手院といふ天台本尊千手觀音側小藥師堂あり堂の脇小井三あり故小名づく歟其初め詳らぶらざきと後ろの山間淺佛具殿谷といひて中英小屋敷跡あり又其頃の寺田ふりとして村中小佛具殿田と唱ふる田多くあり。寺寶小平親皇

西大須賀村

東三井寺 瑠璃光山子手院 什物

平新皇

将門妾

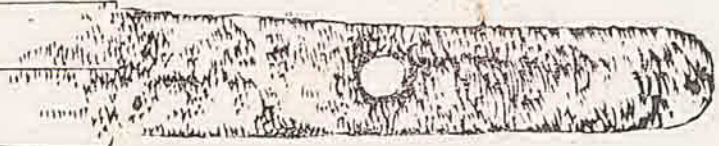
桔梗之前

所持

鏡表

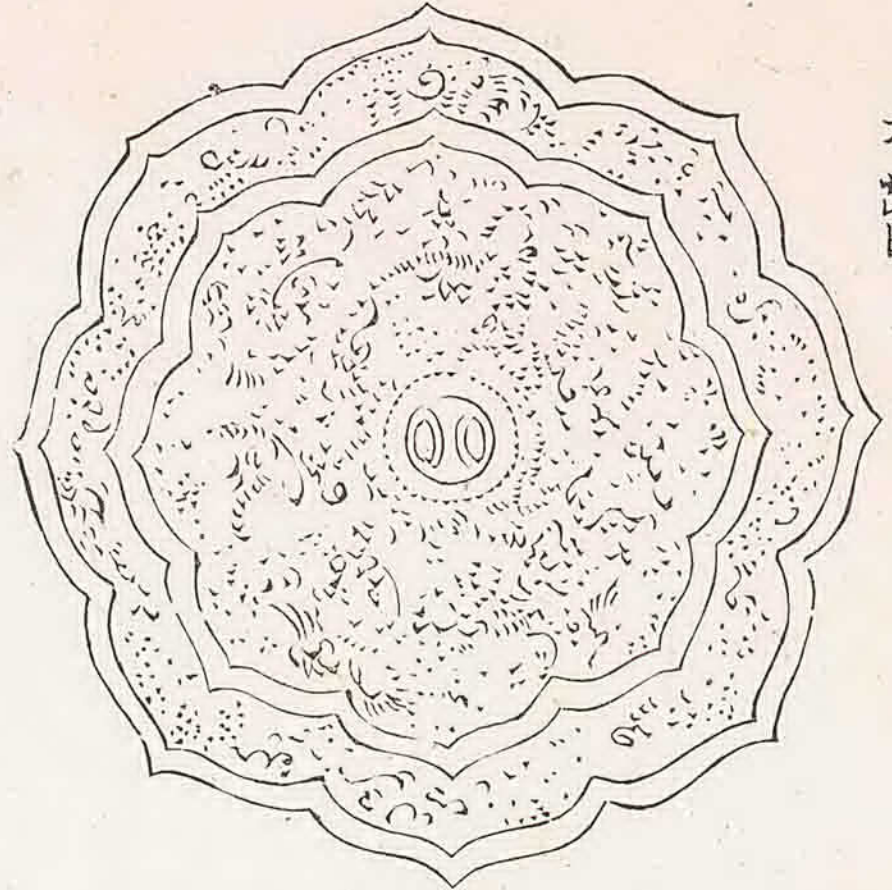


同鏡

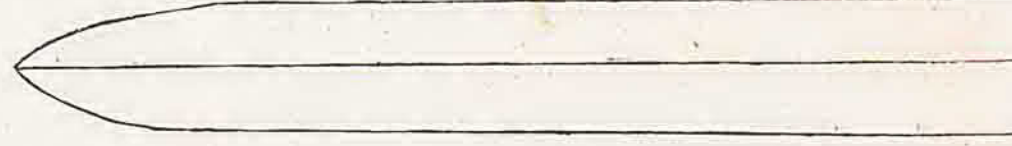


銘

同裏



大和圖



將門の妾桔梗の前此鏡一面同懐劍あり里老云この二品むら
しより紛失の事度々ありしが必その家ふたり有て持主よ
り又此寺に納むる事數度ふ及べりとぞ

西大須賀城 同西大須賀村ふあり東國戰記ふ西大須賀の城主

西大須賀六郎と見ゆ

兒塚 西大須賀村の内四屋とりの所の入口道の東畑の中ふあ

る田國雜記ふ云志もゆぬこの國兒の原といくる所ありいり
ふる故ふかくる名此所を侍るぞと里人ふ尋なればふの在所
白浪青林横行の地たるふよりとある少人此通りなるふ衣装
など剥とるれとあらす剥へ殺害し侍りる夫より此所残かや
らふ号し侍るより語侍れば今更のころちて塚此ほとり
立よりておもひつづけけて廻向し侍る

佳人落命荒原上 薜庭古碑空刻名 勿恨青林犯花影

浮生有限辱兼榮

白浪ふ浮名残ふがに兒の原戀ぢふまつる身とも聞バや

標注ふ兒の原下總國香取郡大須賀村の道の邊ふ兒塚あり此

邊則兒の原也今叢祠鳥居ありて里俗兒大明神と云埴生郡の

是ハ香源太河岸より香取郡の滑川觀音ふの間の間也小異

取郡也源太河岸より行ハ滑川觀音夫より西大須賀村と過て同村の

東國戰記ふ所ノ名ヲ問バ兒子が原ト申ケル下總守義長西大

須賀六郎ニ向テ見ケ原ニ謂レ有ヤト云申上ケルハ昔小菅且

林寺ノ住寺智證上人此處ニ間居ス或時智證隣村ニ行日暮テ

歸リシニ此原二年頃十五六ノ童子顔色青ザメタルガ立煩居

タリ上人云御身未ダ若年日暮ニ及テ何方へ行者ト見答テ

曰某ハ都方ノ者ニテ候處喘息ヲ長ク煩シガ家乏シク療治不

叶故清水觀音へ七日籠り候所滿ズル夜ノ夢ニ下總國西大須

兒ちご
の塚つら
圖づ

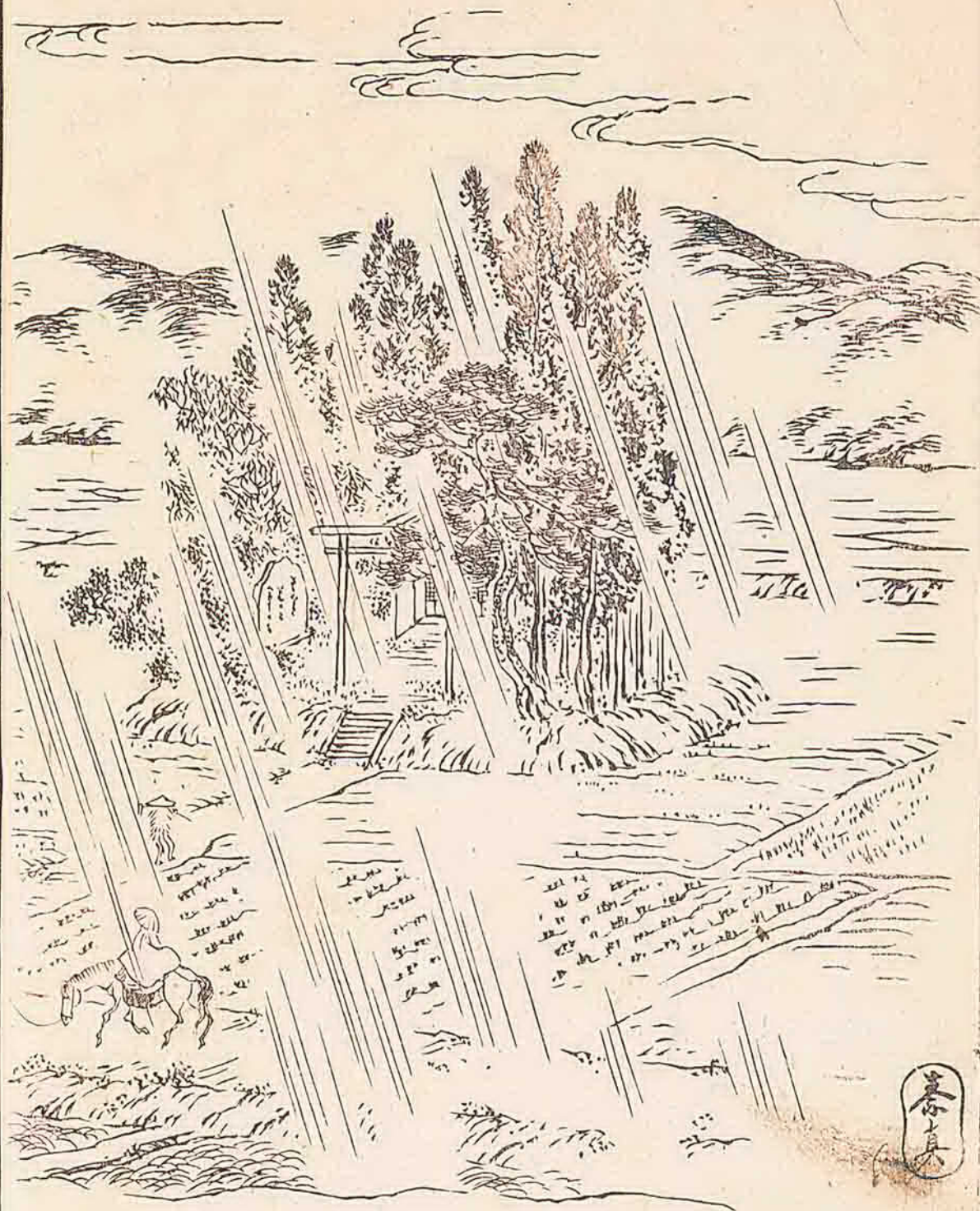
古くはふるきまは

あがらちこのま

さひちみさつら

身ともまらや

道興准后



賀ニ智證ト云高僧アリ尋行テ血脉ヲ傳ナバ本復スベシトノ
 告ニ依テ叅候ヘ共草卧テ一足モ引シズ哀レ西大須賀ヲ教玉
 へト申智證聞テ其人ハ我也トテ菴ニ伴ヒ昼夜礼拝念佛一千
 日修サセケレバ次第ニ全快ス行滿チテ法ヲ授ケ都ニ歸スベ
 シト仰ケレバ童子悦ビ休ミケル其夜智證ノ夢ニ童子見エテ
 曰我實ハ人間ニ非ズ長沼ニ住ル主也三熱ノ苦ヲ不道故ニ童
 子ト成テ血脉ヲ戴キ其苦ヲ免レ今天上致ス也報恩ニハ永ク
 此處ノ守護神ト成テ民ヲ可守ト云テ失又依之其處ニ今宮明
 神ト觀請ス云智證ノ菴室ハ遷化ノ後寺ヲ建号正福寺云文略
 今思ふ小あの説ハ後人の作あるべし

又佐倉風土記小東國戰記を引て有永祿中僧來于此而詠歌曰
 知具乃波羅能遲波志留毛乃與茂阿良自等古呂迹比斗都迺志
 流之那那礼婆由是觀之文明中有碑而至永祿中碑已失乎今僅

有二小祠而俗謂之兒宮馬近年馬と祠の側小
 因云幡谷村ハ是より程近也所也市川團十郎公幡谷村の産
 了より馬馬が芝居年代記小堀越十藏生國ハ下總國佐倉幡谷
 村の産ありその子知名海老藏と名唐犬十右衛門名づく所
 あり長トて市川團十郎といふ 取意

助崎城

名古屋村ふあり佐倉風土記小距佐倉東北三十六里千

葉常胤六子第四胤信居大須賀稱大須賀四郎後退老於此而稱
 信濃守其子孫二十葉居之東國戰記有助崎城主大須賀信濃守
 信景馬天正十八年與千葉氏俱滅城廢焉壘有舊新二址其舊處
 生獨活甚美盛人採之乃為崇近歲村僧採而還菴其夜戶外有聲
 曰還獨活竟夜不止僧怖畏不寢夙興還於其處云

公家塚

同村ふあり其地言小御門至今不得畚菑傳有貴卿流卒

干此味詳為何人俗言 朝廷貴爵人謂公家也按元弘之亂笠置

城陷北條高時執^テ後醍醐帝近侍諸卿流^ス之遠國平大納言師賢
配^シ下總國寓^ス于千葉貞胤乃薙髮名索貞遂卒^ス于下總實元弘二年
十月而南朝追謚^ス文貞公車出^ツ公卿補任增鏡常樂記等初師賢詐
稱^シ主上登^ル于叡山今以小御門名推^ス之恐師賢墓與

高岡 香取郡あり源太河岸より十五六町東の方井上侯の陳營

あり石一万天正十八庚寅年領地拜領下總國香取郡高岡二万石

阿部豊後
守正勝云

龍安寺 大和田村あり諸國圭齊録下總國曹洞宗の部ふ二十

一石七斗餘香取郡大和田村龍安寺と見ゆ

迎接寺 佐倉風土記在^ニ冬父未詳年歷佛器多識永仁三年有觀音

閻魔夜叉等假面十餘枚言惠心之所作云此の寺ふ鬼の舞と云

大とあり閻魔大王ふと美々しく衣冠を粧ひ皆面をかあり赤

鬼青鬼など多く出地獄ふて死人を責るまねをかさいと賑り

是も廿年ふ一度にふるにござるを佛の假面鬼の假面牛頭馬頭

などの假面いたまもいとくあるものありといひり下小堀村ハス

父より神崎佐原津の宮おと

經て小見川のまこ一上あり

名木古城 佐倉風土記ふ云在^ニ名木距佐倉東北四十里傳柴山彈

正居之未詳其時世馬東國戰記所謂名木彈正忠是乎

神宮寺 並木村あり諸國圭齊録新義真言部ふ十四石四斗餘

香取郡並木村神宮寺あり

神崎明神 神崎ふあり利根川へあり出たる高き山の上ありむ

か一此山の麓屈曲の所水逆卷て船の通路至てむつりく是

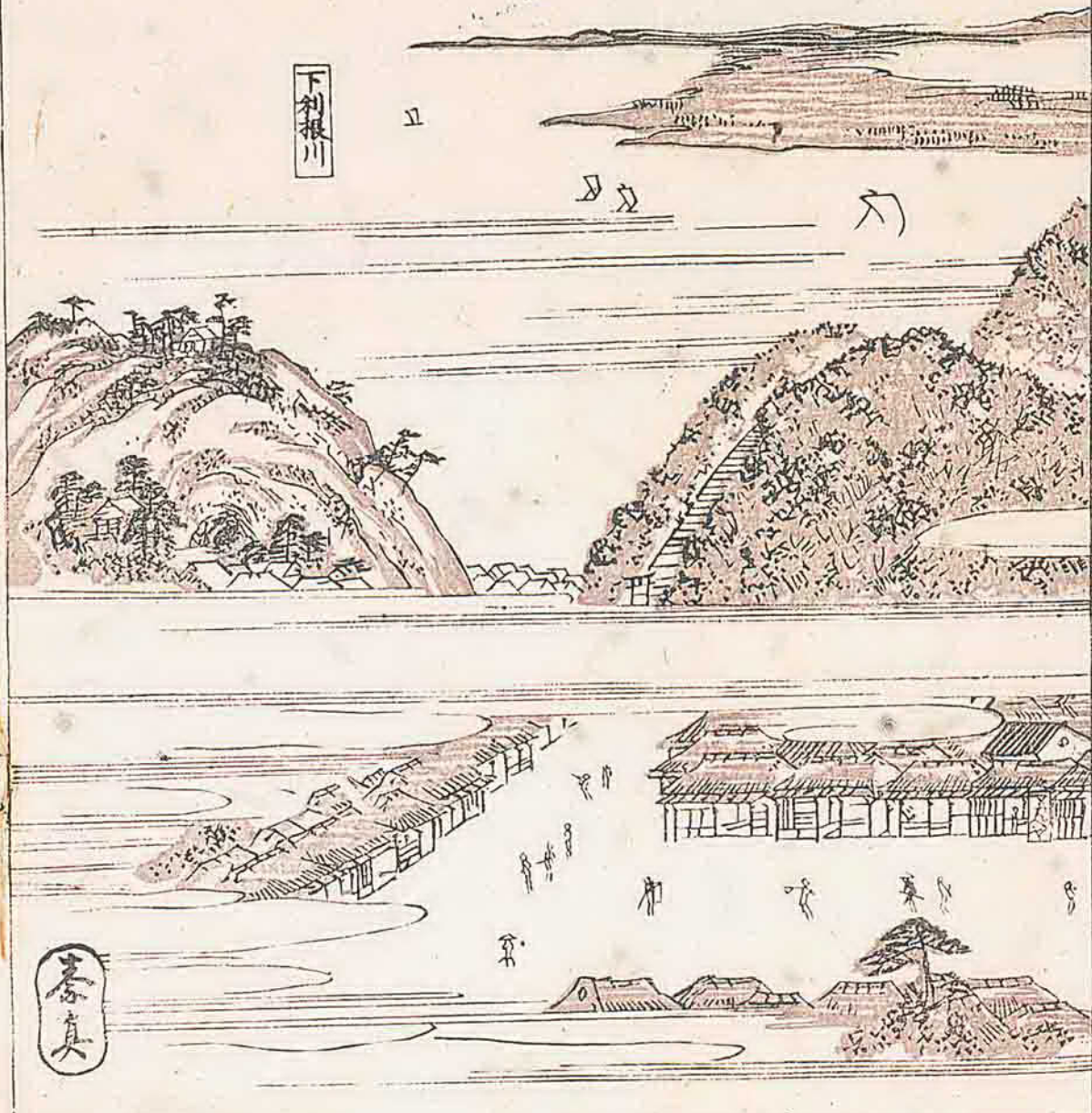
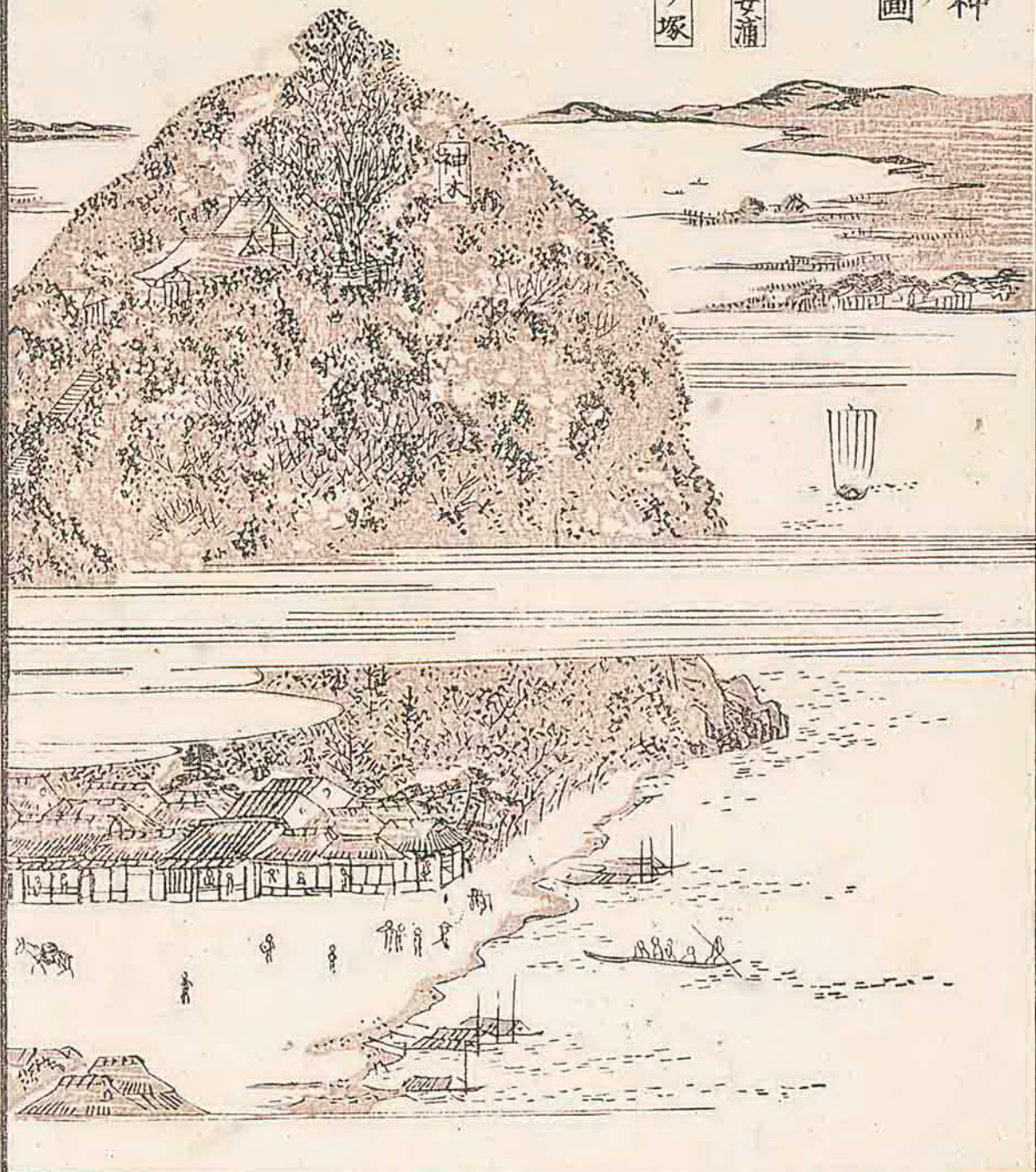
を神崎の巻と唱へて船人大小恐る所ありと云り今ハ洲の

し其頃此舟唄ありとてあつた神崎森の下楫をよくとき船主

どのよこの唄今もよくうとふ

神崎明神
の圖

男女浦
ニツ塚



下利根川

川南

廿九

春真

香取志云神宮を相距夏三里餘同郡神崎村不在傳云面足尊惶
 根尊を祭まると此社今神宮よ幣帛を備せ封物を與を別官
 より神地を賜りて神事を執せまば末社非を然共昔大戸神
 崎兩莊ハ別て神宮祭祀の用途を掌り改造の時ハ城殿を造
 定役也又此兩莊ハ大祢宜家の旧領也長寛二年六月関白左太
 臣家政所御下文不見えたり斯て大戸社末社なきハ神崎社も
 昔末社ある夏決茶一

追考應保二年六月三日の大祢宜日記云又於次男知房者申補
 神崎社宮司可知行彼社領之由書與讓狀畢又嘉元二年四月廿
 二日大祢宜實綱与棄狀不讓與下總國香取社領云大戸神崎村
 田櫻田以下神祭物等之事是等の文を以て見まば昔末社ある
 む夏愈明け一

鹿嶋日記云からざら此神社不詣づ社の前ふふんとやもん

トヤとよふ大樹ありいと年へたる桂の木なりけと

神代より志げりてたてる湯津桂さかえゆくらんかたり志
 らげも

山桂 本草綱目月桂條
草木錦葉集六行
 枝葉とも白ひい

樟腦のおと一奠
 トて吞バ桂枝ふ

似たり實ハ榎の
 實ふ似て皺あり

茶色あて少一黒
 を帶たり八月頃

落る花ハ大木故
 見えがごと

山桂

同實



宗且寫真

そもく神崎てふ地名はあくよも西北の方北河むかひ不清久
 橋向押砂ふどの村ありいふへハカ根の河面ふたぎさた
 り一ふ元和慶長のところかおさ此方ふ水せく堤を築て新田を
 心らうきたありとそ我のらふさハ常陸國河内郡の半田の里
 ふさむむひて二里をくりけ大沼ありこの神崎の地はさ
 出たる山崎みて神の社なれば神崎といへりとあんこよ
 り見渡の中嶋ふ片葉葦もろをあくとして二くさの葦生たり
 上つうさるるいえろをみて陽あ里下つめさなるハ片葉ふて
 陰ありそれ嶋をふとつとぬといひその浦残男女は浦とい
 ふ平治元年の社圖ふ大浦とも真世守良ともあるハこれあり
 その嶋ふ大神天降まを今の地ふうつ一まぬらせたり半
 田は里あても此神をうつしていそひゆるりけん今俗ふた
 まさはといふ社ありそハ安婆嶋のよこなよりみやこの近さ

己よりある安波大杉明神もかよひてたハ常陸風土記ふは
 安婆之嶋とみえさうりそのふたつ嶋より時々龍燈あがりて神
 崎の社ふか、り志べありてもと此所ふへまねつること
 ありとるんま三代實録ふ元慶三年四月下總國正六位上子
 松の神小從五位下を授らまことみ由神崎の西隣の里ふ今
 も小松村ありて正元元年十二月の文書同二年三月ハ文書ふ
 どに小松郷みえたるをむかふこれぞ子松は神あること疑
 ありりける

諸國圭齋録下總國部ふ二十石大明神 香取郡神崎郷 神崎伊織

と見ゆ

押砂河岸 神崎と相對て川北あり中古大水の篠砂おし來りて
 出來一地ある故押砂と名つくとつ安波大杉明神へ參詣の
 人ハも此河岸より土一安波一里半

おしあきが
押砂河岸よりの
神崎眺望の圖

五



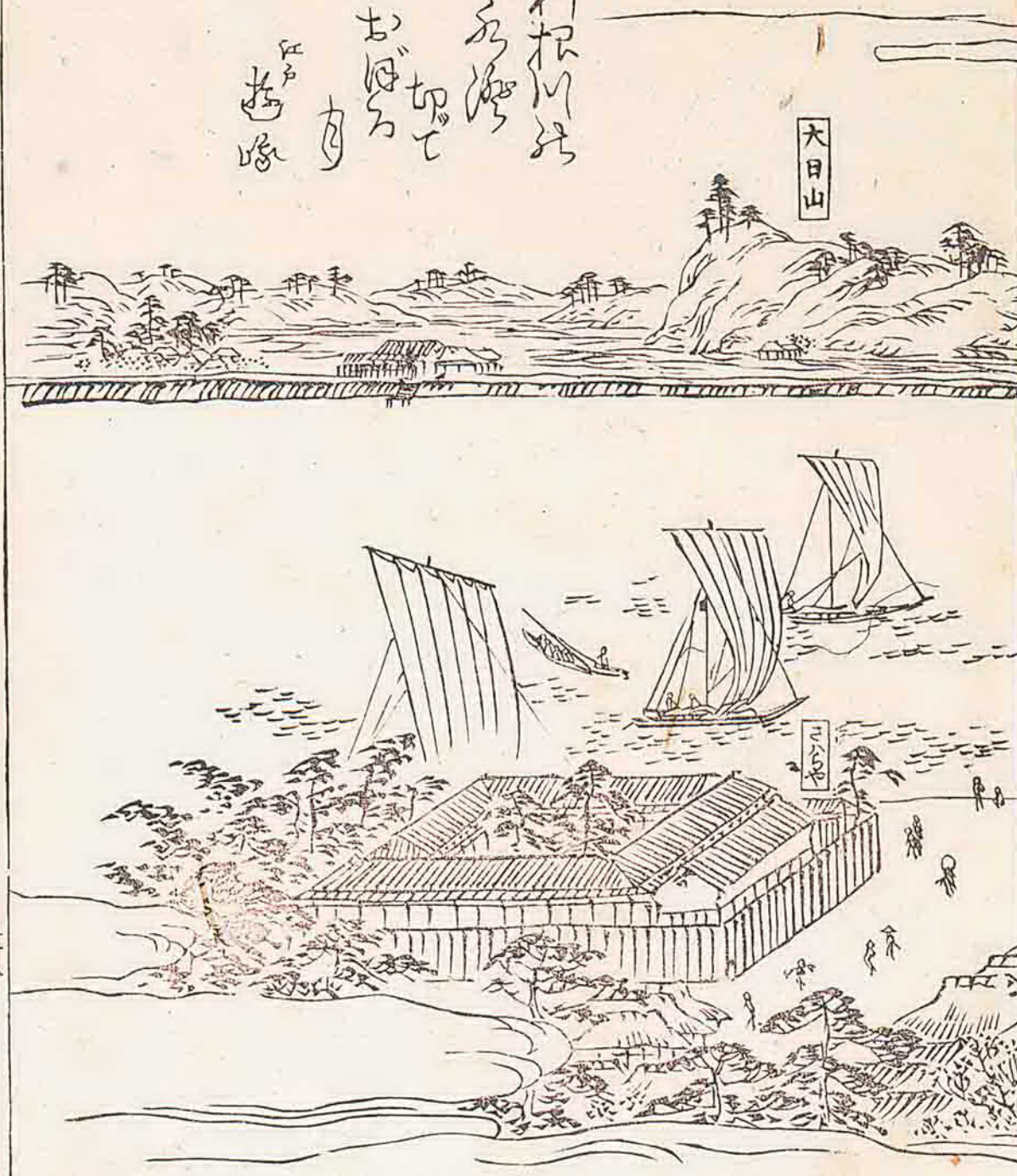
神崎森

アタゴ

春真

利根川沿
水邊
おほく
おほく
おほく

大日山



五
川南

世二

大須賀川 ちう大戸川ともいふ香取郡大須賀原の邊より出て
北に流き大戸川に至り西派とあり一は北川尻沼谷原の間より
里利根川に入り一は里大戸川より東に流れ岩崎下より利根川
に落つこれを粉名口川といふ

大戸神社 香取志云神宮城相距二里同郡大戸村にあり社家
傳説天武天皇白鳳年中建此社所祭手力雄神也此社の祭祀數
度あり大槻神宮祭祀に擬又神宮より諸神饌幣帛を備せ神地
神戸を分與て祭祀の用途に充並祠職の秩録とを神室龍面此
最奇物也木も非金石の類も非因て人作も非と云昔同郡
矢作野に天降ると云今此所を天降と號し里に祠を建て祭ま
り村里早魃の時請雨塚と云ふ処に此面を出し三度水を濯
時ハ必龍起て雨を降すと云

佐原川 同郡折幡より出て新市場を過牧野に至り大
崎邊より出牧野に至り一水とあり佐原大橋の下をまがて利
根川に入る

佐原へ下利根附茅一繁昌の地なり村の中程に川有て新宿本
宿の間小橋架架と云米穀諸荷物の揚さげ旅人の船川口よ
り此所まで先をあらそひ兩岸の狭さをうらみ誠小水陸往來
の群集昼夜止時あり

諏訪明神社西の方村をつき不有新宿組の産土神あり例祭九
月十五日より十七日迄也牛頭天王社東の方濱宿といふ所不
河り本宿組に産土神とに例祭六月十一日より十三日迄此
両祭礼至て賑はしく何れも二重三重に屋臺十四五輛つゝ花
と加ざり金銀をちりばめ錦繡の幕と懸簾子をのゝ拍子つと
ふざやうに町々をむさぼる見物に群集人の山をなすこと
とに目ざやうに祭あり

香取魚彦ウヅリイサノヒコ佐原橋本町伊能茂左衛門イノノシゲサヱノカミと云イノノシゲ類則の香取四家集

良祿茂左衛門彌青藍香取郡佐原人畧既長篤學嗜古游賀茂真
淵之門學益進器其作歌以萬葉集為歸別為一家趣傍善画好寫
梅花及鯉魚騰泉之類亦為世賞玩天明二年三月二十三日歿于
江戸濱町橋居年六十其在江戸以自稱香取魚彦故以香取氏顯
所著有古言檢萬葉集十歌華端記兩
夜燭百人一首傳魚彦家集等若干卷

二本竹 鹿嶋日記云、諏方神社の鳥居を毛死ていと高き石坂

を比なれば、山のえらに別當の坊あり、坊の前ふ天明三年とい

ふろ、此夏とみみふりりといれ竹生出けるをり、此里志らり、

殿津田日向守平信之朝臣のよみたまへる歌あり。

松栢のとれをれきふらなりてや生おけり、竹のふりりとい

南郭集ナカク 將發佐原半七彦十載酒到舟留示二子

期日將廻棹不關乘興輕一樽携酒別二子即舟情信宿交相得

江山感且生水郷來往熟重聽竹枝聲

寬齋遺藁クワンサイ 佐原訪此江山主人不遇因作

千里游踪偶遠尋柴門空鎖碧江潯閑庭就欲題名姓春淺芭蕉未

展心

津宮河岸 香取神宮一の鳥居水中不建り、是より香取三社參詣

の人、ふれ河岸より上り神宮へ參詣を、津宮の名義へ當所不籠

神社といふありて、香取志ふ奥津彦神奥津姫神を祭る、此神

へ古事記ふ須佐之男命の孫大年神の子ふ、延喜式ふ籠神二

座、從五位上大邑刀自次ふ小邑刀自云、やいろと素津宮といふ、

そむく津といふ、湊入の船おのく、ふの處ふ集風を待つ、ときと津

といふ、ふの所ふ船のたふ所ろ、鹿嶋ふへ今大船津といふと

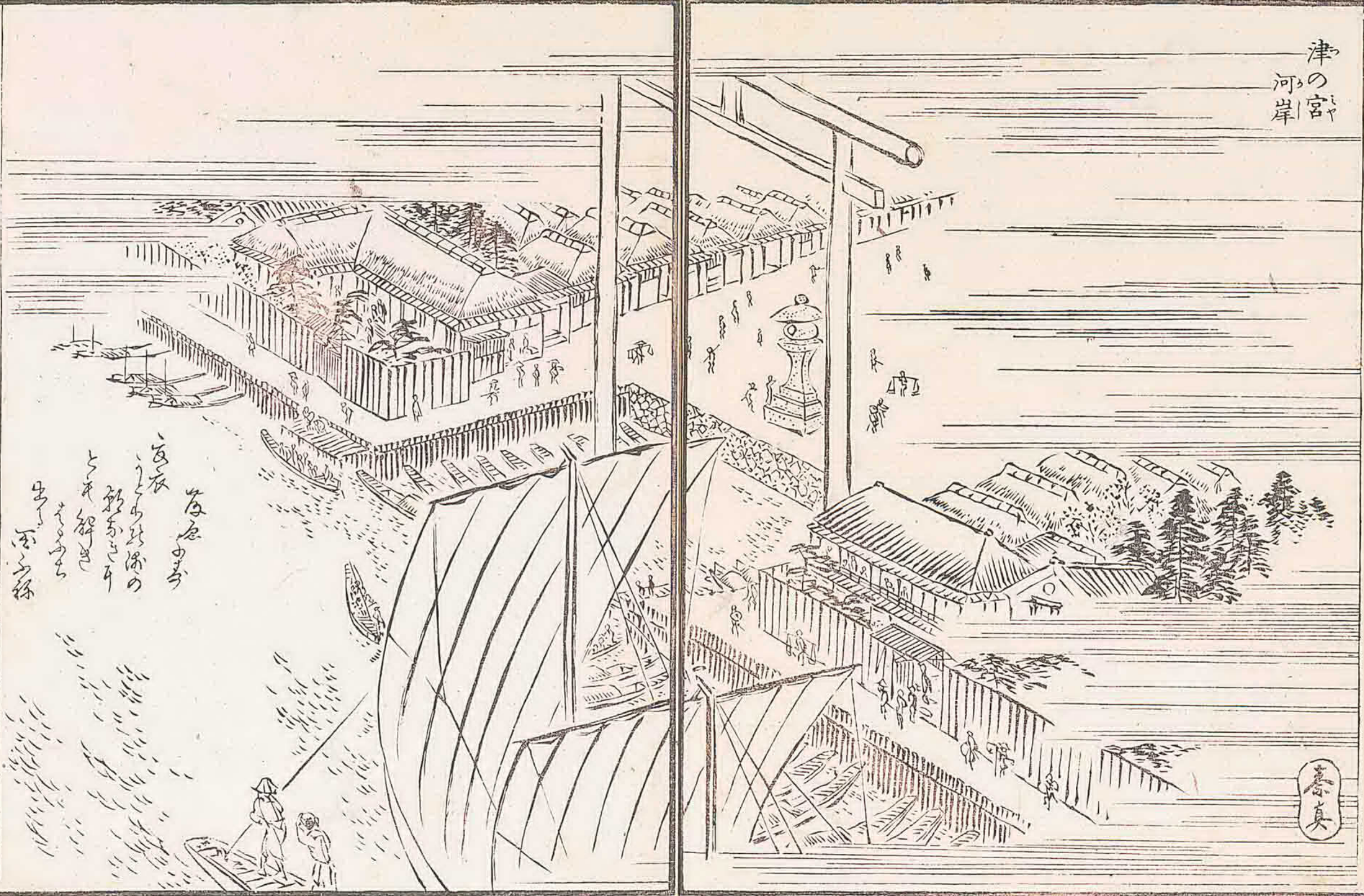
もいふ、くハ津宮と云ひ、くハ風土記ふ見ゆ、吾神宮の津宮

ハいふ、くハ船の來集ハ所ふる故津といひ、ふの津鎮護の宮た

ると以て津宮といひ、ねる處、その後人居とふ、村の号と

もあきり

津の宮
河の岸



津の宮
河の岸
舟の往来
舟の往来
舟の往来

真景

香取大神宮

下總國香取郡正殿經津主大神神代よりの御鎮座

みていと古き神あり。夏ハ香取志不詳クもまへ畧レ之

相殿神

比賣神 天兒屋命 武甕槌神

攝社末祠をべて八十末社之と畧之

大小の祭祀をへで九十餘度内十八箇度大祭祀畧之

神寶

廣矛 于滿兩顆 神楯 太刀 矢 鞭

此外古器古書等數多

名所

龜甲山 木母杉 弓掛杉 乍候杉 三本杉

牧野 釜塚 笠塚 鹿塚 星塚

神井

御手洗井 氷室井 龜井 大坂井 琵琶井

下の井 真禰井 西隱井 東隱井 奴久井

石井 太刀洗井

七橋

大坂橋 五段田橋 萱田橋 小山橋 下井橋

氷室橋 地口橋

八坂

大坂 龜邊坂 若宮坂 下井坂 氷室坂

御手洗坂 奴久井坂 幸若坂

此外名勝古跡數多

鹿嶋日記云香取神社にまうた。御まへの庭に大坂了杉小坂了

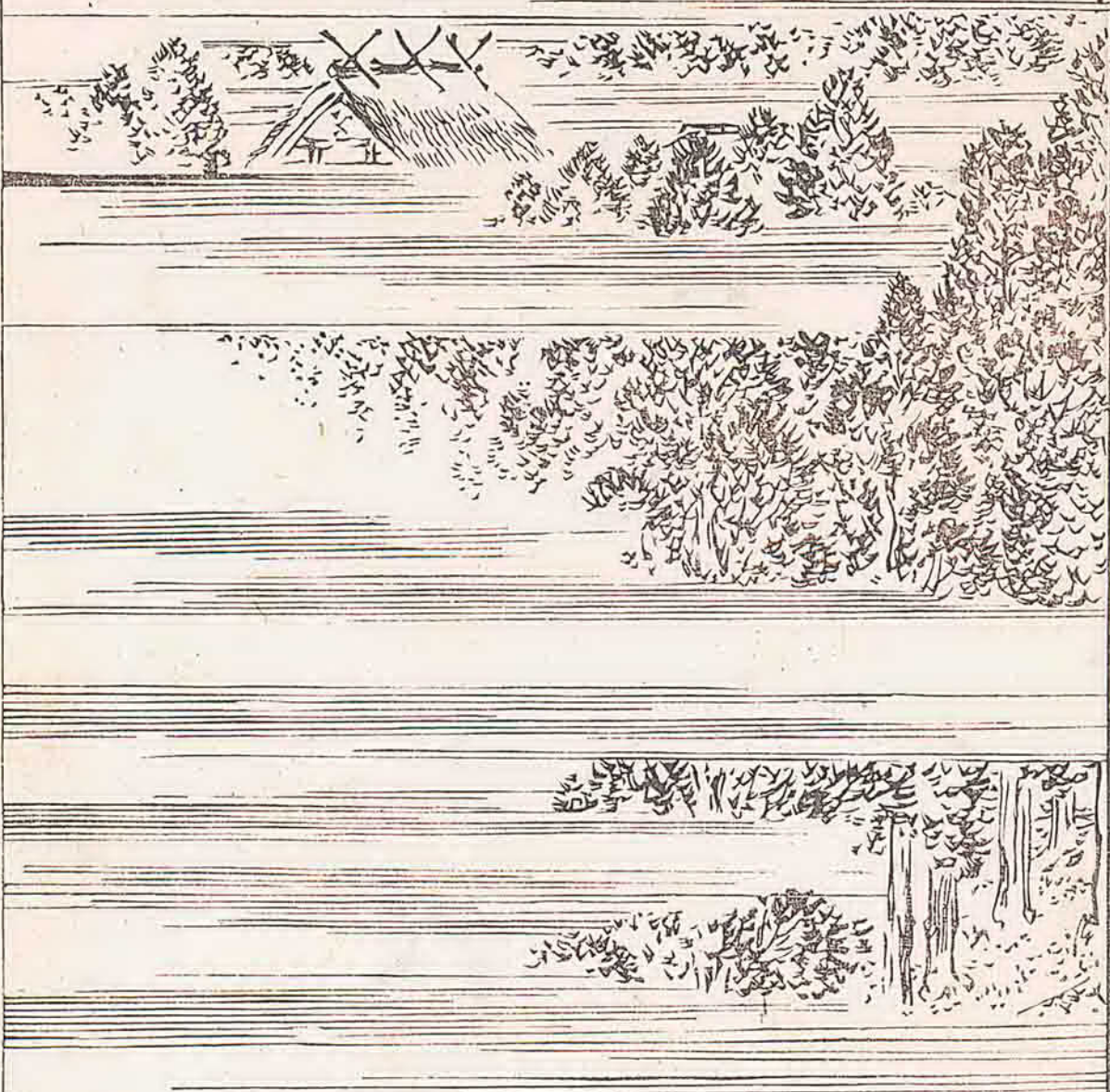
二本たてり。それさほいく千代ふりけんものともまらばこの

るうたも。老木若木れ杉いとねわくり

香取
大神宮
大鳥居
の図



香取



まろろをぬ國伐やひ〜大神カミは宮あか〜こきいたれふと
 杉社ヤシノヤのうしろに櫻サクラ馬場ウマバとてとなくみきまわさるゝ所
 あり、板來イタキの里への伐とあるらんれどいひ〜ふあどとらか
 たふけふとれたとひとむきび立めかりたるふぞた〜にそ
 こととたむひとくれぬ、神宮寺にまうた、洪鐘フウショウは銘に奉懸下總
 忍香取大神宮寺大鐘一口大且那周防守宗廣天工泰景重。于時
 至徳三年丙寅十月口日敬白とゑりたり

總常日記クニノコト小鹿嶋大神カシノノカミとふらひて世々ふいつくれおひ〜ぬに
 神あり本殿ホノノミヤ并殿ナハミヤ神樂殿カミノ樓門ノボリ其外の末社スエノミヤおなく此國あての大
 社とおふ〜云

香取神宮

香取正文

か〜ある布衣フイの居イ靈マタの御稜威ミカミより草木もあつふきとやめふん

